

支援 生かしネットワーク

西日本豪雨

西日本豪雨を受け、国際医療

ボランティアAMDA(本部・

岡山市)は7月7日～8月15日、

災害支援に関する連携協定を結



難波妙理事

ぶ総社市と被害の大きかった倉敷市真備町地区で緊急支援活動を行った。統括役を務めた難波妙理事(55)は総社市に現地での活動や教訓を聞いた。

(小若菜美) 1面関連

総社、真備で緊急活動 AMDA難波理事に聞く

40日間で医師や看護師、薬剤師ら計246人を派遣し、被災者の診察、健康相談、鍼灸治療などに当たった。南海トラフ地震に備え、AMDAは県内外の自治体

や医療機関などとネットワークを結んでいる。2017では、支援先として想定していた自治体の人らも

3年ごろから定期的に会議を開き、高知や徳島県の避難所に医療チームを派遣する想定で情報交換や交流を

重ねてきた。今回の豪雨

は、支援先として想定していた自治体の人らも

3年ごろから定期的に会議を開き、高知や徳島県の避難所に医療チームを派遣する想定で情報交換や交流を

重ねてきた。今回の豪雨は、支援先として想定していた自治体の人らも

3年ごろから定期的に会議を開き、高知や徳島県の避難所に医療チームを派遣する想定で情報交換や交流を

重ねてきた。今回の豪雨は、支援先として想定していた自治体の人らも

3年ごろから定期的に会議を開き、高知や徳島県の避難所に医療チームを派遣する想定で情報交換や交流を

重ねてきた。今回の豪雨は、支援先として想定していた自治体の人らも

3年ごろから定期的に会議を開き、高知や徳島県の避難所に医療チームを派遣する想定で情報交換や交流を

重ねてきた。今回の豪雨は、支援先として想定していた自治体の人らも

3年ごろから定期的に会議を開き、高知や徳島県の避難所に医療チームを派遣する想定で情報交換や交流を

重ねてきた。今回の豪雨は、支援先として想定していた自治体の人らも

3年ごろから定期的に会議を開き、高知や徳島県の避難所に医療チームを派遣する想定で情報交換や交流を

重ねてきた。今回の豪雨は、支援先として想定していた自治体の人らも



総社市の避難所を巡回し、被災者の健康相談に応じるAMDA医師ら(7月29日)



炎天下で活動するボランティア向けに、熱中症の対応に当たった(7月15日、総社市下原)

「復興には医療」医師らに熱意

ナでは7月9日、千人近い避難者を冷房設備がある複数の施設に移すことになった。救護所の対応を続けながら、世帯ごとに聞き取り調査を実施。医療的なケアや介護を必要とする人、乳幼児がい

る世帯などを考慮しながら移動先の割り振りを決めた。各施設での受け入れ準備や移動時の誘導も

あったが、ボランティアや災害派遣医療チーム(DMAT)などと協力し、何とか夜までに終えられた。

大規模な浸水被害を受けた倉敷市真備町地区では、医療機関のほとんどが壊滅的な被害を受けた。まび記念病院は18日午後から健康診断用の車

両で診療を再開。AMDAは健診車を手配し、医師や看護師を派遣した。

かかりつけ医と顔を合わせることは住民にとって何よりの安心。「地域の復興には医療が必要」と

頑張る病院の医師やスタッフ、彼らを支える近隣地域の医師らの熱意は素晴

しかった。被災地は暑さが厳しく、AMDAとして初めてボランティアへの熱中症対応も

行った。看護師らが氷や経口補水液などを用意して待機し、熱中症やけがの処置に当たった。

今回多くの人が支援に名乗りを上げてくれたが、渋滞や道路の冠水などで現地に行けない、被災地が暑過ぎる、現場のニーズが変わるなど、完全にマッチさせることができなかった。

これはどんな災害でもあり得ることだと思ふ。「晴れの国おかやま」で

雨による災害に遭うとは思っていなかった。「自分は被災しない」という思い込みを変えることが必要だと感じた。一人一人がハザードマップで住んでいる地域の状況を確認し、気候変動も踏まえた上で、防災意識が正しいかどうか、いま一度検証してほしい。

「地域の復興には医療が必要」と

頑張る病院の医師やスタッフ

彼らを支える近隣地域の医師らの熱意は素晴

しかった。

被災地は暑さが厳しく、AMDAとして初めてボラ

ンティアへの熱中症対応も

行った。看護師らが氷や経口補水液などを用意して

待機し、熱中症やけがの処置に

当たった。

今回多くの人が支援に名乗りを上げてくれたが、

渋滞や道路の冠水などで現地に行けない、被災地

が暑過ぎる、現場のニーズが変わるなど、完全に

マッチさせることができなかった。

これはどんな災害でもあり得ることだと思ふ。

「晴れの国おかやま」で雨による災害に遭うとは思